

## 所員の自著紹介

### Subete al espano

——スペイン語で行こう！（テキスト）

アルトゥーロ・バロンロベス・高松英樹・佐藤麻

里乃・二宮哲 著

朝日出版社2006年4月1日（76頁）



### 『ことばの習得と喪失

——心理言語学への招待』

勁草書房 伊藤克敏著

2005年4月25日刊（192頁）

ことばの習得と喪失は表裏一体を成している。本書は両者の関係を多角的に捉えようとする試みである。前著『子どものことば——習得と創造』（勁草書房）と子どもの母語習得過程のみを扱ったのであるが、本書では子どもの母語習得と第2言語習得・教育やバイリンガリズムとの関係について最近の研究成果を踏まえ考察している。

大人の言い誤りは方言や退行現象として幼児のことばとの関係で考察している。ことばの喪失については、脳の障害によるものと長期の海外生活、高齢化による母語喪失との相関性を論じ、更に、幼児ことばとの関係について考察している。

第1章前半では最近注目されているトマセロ（Tomasello, 2003）の研究に言及しながら、子どものことばの発生と習得過程を考察している。特に、文法関係の習得については最近の研究を紹介しながら、文構造の構築原理、複文の習得過程についての仮説を提示している。後半では最近研究が進みつつある発達語用論（Developmental Pragmatics）の研究成果を踏まえ、会話能力の発達、ことばによる子どもの社会化の問題を扱っている。

第2章では獲得した母語をどのように喪失していくのかを脳損傷による失語、認知症による言語喪失、長期海外生活による母語忘却の3つのケー

スを比較しながら共通点を探る。また、それらと子どものことばや大人の言い誤りとの相関性も検討している。

第3章では脳の発達と機能の観点から母語習得と外国語習得との相関性について考察し、児童の外国語習得の特徴と外国語習得の開始時期について検討する。更に、子どものバイリンガル習得過程とその特徴、バイリンガリズムに対する評価の変遷などについて言及している。

第4章では、大人の言い誤り（speech errors）を音声、語形態、意味、統語の面から分析し、言い誤りの構造と特徴の解明を試みている。そして、言い誤りと幼児の発達途上言語（developing language）、そして方言の特徴との相関性についても考察している。

第5章では、ヨーロッパやアメリカにおける「ことばと心理」に関する研究の史的展開と最近の研究動向を鳥瞰している。

ことばと心理の研究には2つのアプローチがある。1つはことばと心理・認知の関係を説明するための理論的モデルを構築する方法と、もう1つは子どもの発することばを分析し、発達段階によることばの発達過程を研究したり、ことばの誤用とか発せられたことばを手がかりにことばの心理的処理方略について研究する方法である。両者は相補的な関係にある。

本書では両者を比較しながら、後者、つまり、発達心理言語学や実験心理言語学の立場を取っている。あくまでも生のデータの分析（こういった言語現象の分析に基づいた研究は最近 Usage-Based Approach（M. Barlow & S. Kemmer eds, 2000）と呼ばれている）からことばの発達過程やことばの処理についてのメカニズムに迫ろうとする方法を取っている。



## 『スタール夫人』(人と思想シリーズ185)

佐藤夏生著 清水書院2005年11月 (227頁)

フランス革命勃発時の財務総監ジャック＝ネッケルの愛娘であるスタール夫人。彼女はロマン主義理論を確立した文学者として、『デルフィーヌ』や『コリーヌ』でヨーロッパに大きな反響を巻き起こした小説家として知られる。しかし夫人は文学ばかりでなく、革命についてを含め、政治・社会・文化の広い領域にわたる著作を残している。

その生涯はフランス革命の時期と重なるが、18世紀サロンで育まれ、激動の革命期を生き抜き、皇帝ナポレオンと対立して追放の憂き目にあう。自由を求めて、レマン湖畔のコペからモスクワを経てロンドンに亡命する。

本書は夫人のそうした生涯と思想を、近年の活発なヨーロッパでの研究成果をふまえて描き出した、日本初の著作である。

## 『副詞的表現をめぐる——対照研究——』

武内道子(編著) ひつじ書房 2005年3月31日 (252頁)

本書は、神奈川大学言語センターの共同プロジェクトのひとつ「言語の普遍性と個別性に関する研究」という研究グループによる最初の出版物である。

神奈川大学外国語学部には、日本語、英語をはじめ、中国語、韓国語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語など多彩な言語を研究対象としている人が集まっている。ひとつの言語現象をめぐる個々の言語の実際を語る場があれば面白いだろうという発想のもと、「対照言語研究会」を立ち上げ、97年以来研究会を重ねている。2003年度に、神奈川大学共同研究奨励金への応募の際、まとまった形で発信しようということになり、すでにはじめていた副詞的表現の研究をテーマに、多額の研究資金をいただき、本書刊行の運びとなった。本書に収められた10篇の論考は、すでに退職ないしは転職された3人を含むメンバーの共同研究活動の成果である。

副詞そのものをタイトルに掲げた研究書がほとんどないのは、その意味、機能、形態の取り扱いが難しいということがあろう。本書は副詞的表現ということによって、既成文法の枠にとらわれることなく、副詞なるものを緩やかに捉え、広く研究を取り込んでいる。分析の方法論的枠組みも文法論、意味論、語用論にまたがる。さらに、日、英、中、露、仏という言語に横断的に渡り合っているということで、対照研究と銘打っている。副詞的表現と目される形式がそれぞれの言語で、どのように語彙化され、構造化され、使用に供されているかという点に関心を寄せ、副詞的表現なるものが複雑、多様であるという本質を浮き彫りにしようとしている。

## 『クラウン西和辞典』

原誠、エンリケ・コントレーラス、寺崎英樹他(共著)

三省堂2005年4月 (xii+2065頁)

見出し語5万2千で、今のところ西和辞典としては最大級の語数を持つ。その中の基本語約7,600語は特に記述を厚くし、どの語義にもかならず用例が付してあるのが特徴である。筆者は主に基本語の形容詞・副詞と動詞の一部、文法解説などを担当した。実際に執筆を始めてからでも20年以上を要し、初めの頃の手書き、後半はパソコン利用に変わり、辞書編纂の方法もかなり様変わりした。

## 『キリスト受難詩と革命——1840～1910年のフィリピン民衆運動』

レイナルド・C・イレート著、清水展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳  
法政大学出版局〈叢書ユニベルシタス827〉2005年9月 (xxvii+510頁+43頁)

本書は、それまでの研究とは異なり、スペインとアメリカの二つの植民地支配に対するフィリピン民衆の抵抗運動の特徴を、フィリピン農村社会

の一般民衆あるいは大衆の意味世界の枠組みにもとづいて理解するという、新しい研究視座を提起した歴史書である。原書の刊行は1979年であるが、刊行後四半世紀を経ても本書が提起した枠組みを超えた研究はない。本書は未刊行の一次史料や既刊文書を渉猟することによって、一般民衆のあいだで伝承されてきた歌や詩や宗教伝統などを掘り起こしたものである。そのなかでも、パシオン、すなわちキリストの人生と死と復活についての現地住民による語りが、変化を志向する運動の文化的枠組みを築いたことを鮮やかに描き出した名著である。

この意味で、本書は、「近現代フィリピンにおける植民地支配に対する民衆の抵抗思想と行動」についての一大叙事詩である。本書を一読すると、著者イレートの類まれな知性に支えられた構想力と、その繊細な感性からにじみ出る艶やかな筆致に感嘆せざるをえない。その理論的な綿密さと情緒豊かな物語の構成様式は、本書がきわめて完成度の高い学術書であると同時に、稀有の優美さを持ったひとつの芸術作品であることを示している。不朽の名作といわれる所以である。